

平成二十八年九月二十五日 富士宮歩こう会歌唱版

【鉄道唱歌】(明治三十三年五月)

地理教育鉄道唱歌 東海道編 「汽笛一声新橋をはやわが汽車は離れたり 愛宕の山に入り残る 月を旅路の友として」

【身延線鉄道唱歌】

作詞 小澤 肇 歌詞推敲協力 身延線鉄道唱歌の会 (作曲 多梅稚)
歌唱 巡音 ルカ (ボーカロイド) 制作 増田敏幸 (富士宮歩こう会企画部長)

♪ 間奏

- 一 汽笛一声富士駅を我が乗る列車 離れたり 三十九駅 九十軒 普通列車の旅とせん
- 二 柚木堅堀入山瀬 近代製紙の発祥地 三大仇討ち一つなる曾我兄弟の寺社もあり
- 三 右に霊峰仰ぎつつ 富士根にたなびく雲の帯 富士宮は登山口 浅間大社に湧き水に
- 四 西富士過ぎれば左に見える 安居山あたりの海の砂 川もないのに沼久保で しばらく富士山さようなら
- 五 三大急流富士川に沿って行きます芝川 筍 梅の産地なり 水とみどりに富める町
- 六 戦国武将信長公 首塚西山本門寺 平家の若武者維盛の お墓が稲子の奥にあり
- 七 稲子で駿河を後にして 甲州十島良いところ 昔は身延路御番所で 今は電車で自動車で
- 八 井出ては寄畑内船へ 南部の火祭り空焦がす 奥州南部の祖の地なり 威風は今に伝えらる
- 九 身延の駅に降り立ちて 日蓮宗の総本山 五重塔の再建に 枝垂桜木花添える
- 十 信玄公の隠し湯の 下部で疲れ癒されん 湯の奥甲州金山は 武田氏支えた軍資金
- 十一 全国各地に木像を 遺せし木喰上人の生まれは一ノ瀬微笑館 山の上でも人絶えず
- 十二 つづけて久那土甲斐岩間 印章で名高き里にして 向いの西島和紙づくり 書家の望み 叶う町
- 十三 視界が開けて 鱒沢舟運の名残り今は無く 敷かれし鉄路に拠るところ 甲駿交流夜明けなり
- 十四 市川大門花火まち 知恵の文殊は甲斐上野 團十郎の出たところ ゆめゆめ共々忘れなん
- 十五 笛吹川を打ち渡り 見よや果樹やら野菜やら 果樹王国と謳われる 甲府盆地の花輪なる
- 十六 四方の山に目をやれば 雲突く山脈いや高く 老樹の深き善光寺 石和の湯けむり指呼の間
- 十七 終点甲府は 中央線 乗り継ぐ人も数多く 躑躅ヶ崎の夢のあと 武田の遺跡守れかし
- 一八 時は人を替えれども 山梨静岡両県の 明るく平和な郷づくり 身延線と共に栄えあれ

身延線と共に栄えあれ

(「富士宮歩こう会」櫻井守会長は「身延線鉄道唱歌の会」会長も兼任されています)

